

I. 学校の概要

昭和町立 押原中学校							
	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数	
学級数	5	4	4	1	14	29	
生徒数	168	129	152	4	453		

II. 実践研究の概要

1. 主題（テーマ）

一人一人の個性を生かす教育を創造し、基礎・基本の定着をはかりながら学力の向上を目指す

2. 内容と方法

(1) 実施学年・教科

・各学年・数学科

各学年の学習内容において特に重要と考えられる単元・分野に焦点を絞りチームティーチングを行っていく方法が効果が出ると考えた。授業形態としては1つの学級を習熟度別の2つのコースに分け二人の教師がそれぞれのコースを担当する形態と一人が教授、もう一人が観察・個別指導を行うという形態で実施した

・1年生・英語科

第1学年の週3時間の授業をチーム・ティーチングの形態で行った。そのうち1時間はALTとの授業とした。英語学習の初期の段階から、個を生かしたきめ細かな指導を工夫する中で、個々の生徒に学ぶ喜びを覚えさせ、基礎・基本の確実な定着と実践的コミュニケーション能力を高めていきたいと考えた。

・各学年・国語科

すべての教科や学校生活の土台となる力が国語の力であると考え、以下の三点の力を育てることをねらいとした。

ア.「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」を支える「国語の知識」

イ.論理的な思考力としての「考える力」

ウ.自分の考え、感じたことを表現するために必要な「表す力」

(2) 年次計画

○テーマ

「学力」の共通理解と指導の手だての確認

○仮説

「学力」をどうとらえるかの確認をし、本校の生徒の実態をみながらどのような指導の手だてをとったらよいのかを考えることによって

教師の資質向上とともに、本校の生徒の学力向上を目指すことができるであろう。

○研究内容・方法

①「学力とは」の共通理解

学識経験者からの助言を聞いたり、先進校の視察などを通して学力向上のための指導方法の工夫改善について共通理解を図り、全体研究会での研究内容を決定した。

②T. T. を活用しての指導方法・指導体制の工夫改善

生徒の理解の仕方に応じたきめ細かな指導に取り組むため、TTの活用の研究と実践を図り、さらにはそれらの習熟の程度にあわせた教材の開発を研究した。

○テーマ

学習活動に向かう生徒の姿勢づくりから着手し、個に応じた教材開発を進めながら、基礎基本の定着を図るための個人差に応じた指導の推進

○仮説

知的な基礎基本の定着のために各教科の指導法を研究するとともに、新学力観に基づく「学んだ力」「学ぶ力」「学ぼうとする力」のバランスのとれた基礎基本の定着であるという認識のもと、生徒個々の学習意欲の高揚を図ることによって、さらなる基礎基本の学力の定着が図られるであろう。

○研究内容・方法

①効果的なチームティーチング・習熟度別授業の在り方

英語・数学の授業においてどのような場面で、どのような形態で個に応じた授業ができるかを探っていく。

②教育課程の工夫によって作り出す10分間授業の活用

毎日10分の授業時間帯をもうけ、継続して指導すべき内容を検討しその時間帯で実施することにより、基礎基本の定着を図る。

③学習意欲の向上を目指す

指導の現状把握をしながら日常指導の工夫改善を目指し、学力向上の一助とする。

○テーマ

さらなる学力向上に向け、共通実践事項の推進を図る。

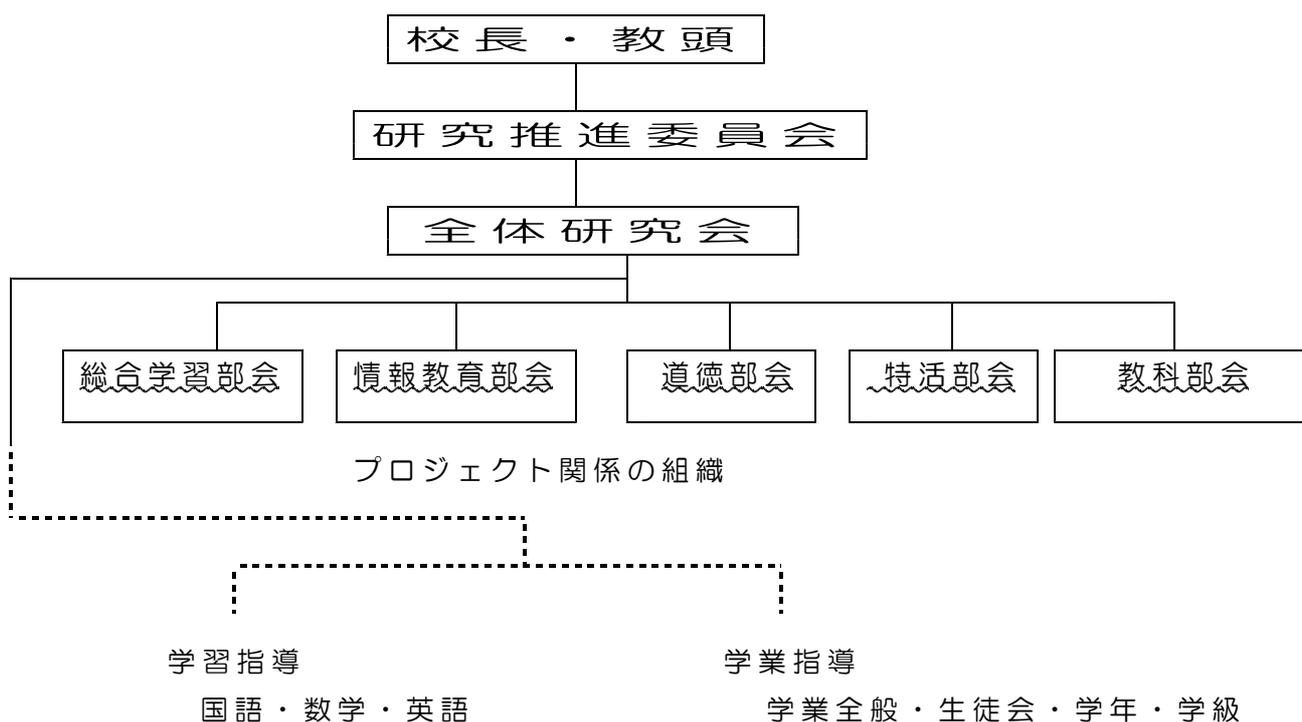
○仮説

2年目の実践を振り返り、その評価と見直しの上に立って実践の継続をすることにより、さらなる学力向上に向けての実践を充実させることができるであろう

○研究内容・方法

- ・2年目の実践内容の継続
- ・3年間の研究の総括

(3) 研究推進体制



・今年度新たに次の部会を発足した。

*学業指導部会（生徒の主体的な態度を育てる部会）

学級、生徒会、学年執行部などの活動を通して、教師側主導でなく生徒が自ら考えていく自主的な活動をより多く実践することにより、学習に向かう姿勢作りに結びつけながら学力向上に向けての方策を研究する。

Ⅲ. 平成15年度の成果および課題

○成果

昨年度の研究から「学力」をただ単に知識の量ととらえるのではなく、生徒の「意欲」まで含めた力としてとらえることを確認するところから研究をスタートした。部会も国語・数学・英語の各教科について研究する学習指導部会と生徒会活動などの活動を通して生徒の主体的な態度を育てる学業指導部会に分かれて研究を進めてきた。具体的な成果を以下にあげたい。

- ①若麦タイム（朝学の時間）の設定により国語（漢字・語句）、数学（計算）、英語（英単語・基本文型）の基礎学力が向上した。また、朝読書に親しむ態度も育ち、図書室の書籍を借りに来る生徒が増加した。
- ②数学・英語におけるチームティーチング・習熟度別学習によって、生徒が授業に興味をもって臨み、授業を楽しんでいる割合が増加した。
- ③学習カルテの作成や絶対評価の規準作りなど個に応じた指導を心がけることで、教材作成や授業方法を工夫し、授業の目標を明確化するようになった。
- ④朝学習や授業に自己評価を取り入れることで、生徒が自分の学習を振り返り次へ

の目標をもつことや、教師が授業の反省を行い生徒の実態を考えた授業作りを意識するようになった。

- ⑤ 選択授業の開設科目の工夫（科目数の増加・基礎コース及び応用コースの設置）により生徒が自分の興味・関心、目的によって柔軟なコース選択ができるようになった。
- ⑥ 学習相談室の開設により、学習を苦手と感じている生徒が気軽に質問をできる雰囲気を作ることができるようになった。
- ⑦ 家庭での基本的な生活習慣（朝食と睡眠時間）と学習意欲についての実態調査を行い、学級担任が資料をもとに指導することができた。来年度はさらに追跡調査を行い、基本的な生活習慣と学力の関係を研究して指導に生かしていきたい。

生徒の実態を調査し評価を工夫していく中で、確かな学力を付けるとは生徒一人一人に目を向けて適切に評価していくこと、そのためには今まで以上に授業を大切にしていこうということ、また今日の前にいる生徒の実態を大事にしていこうという共通理解が職員全体に得られた。

○ 課 題

生徒の学習意欲の面でどのような課題があるかが確認できたので、その点を改善するための取組を実践していくことを確認し、さらに教科指導の面においてもＴＴの有効活用や習熟度プリントのさらなる開発に取り組んでいかなければならないと考えている

また、来年度は学力の評価を生かしたさらなる学習指導の工夫改善を考えていかなければならないと考えている。

- ① 研究テーマへの迫り方、研究仮説を証明するための検証方法、そのための評価規準についてさらに継続して研究していく必要がある。
- ② 生徒が主体的に取り組む態度を育てる活動（生徒会・学年・学級活動）の研究では、生徒が学級・学年・学校への所属感を深め、自分がその集団に認められているという安心感から学習への意欲も向上すると考えて研究を行ってきた。しかし、まだ、十分な成果が出ているとは言えない。
- ③ 生徒も教師も忙しい日々の中で、個々の生徒に対して効果的に指導していくための時間をどう生み出していくか。
- ④ 授業時間の弾力化や朝帰りの会の時間の生み出し方など教育課程作成の工夫が必要である。
- ⑤ 総合的な学習の時間と各教科がどのような連関を図って、どのような力を付けようとしていくのか。
- ⑥ 地域との連携をどう形作っていくか。

Ⅳ. 学力把握のための学校の取組について

- 14年度は生徒の実態を調査するための学習適応性検査を実施した。
- 15年度は学力調査のための標準学力検査（CRT）を実施した。

V. フロンティアスクールとしての成果の普及について

①平成15年度中間発表会

日時 平成15年11月12日(水)

対象 県内の学力向上フロンティア実践校と管内の小中学校

②平成16年度研究成果発表会

日時 平成16年11月5日(金)

対象 県内の学力向上フロンティア実践校と管内の小中学校

③HP作成

本校のHPの中にこの事業の研究経過を載せることを予定している。

(<http://oshihara@oshi-jhs.showacho.ed.jp>)

-
- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T.Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無